

林知己夫編

## 社会調査ハンドブック〔新装版〕

(朝倉書店、2017年、A5判、776頁、17,000円+税)



2002年に刊行された書の再版である。改めてページを開くと、15年後の再版といっても、状況が変化した一部を除き、ほとんどの内容は今もそのまま読めることに気づかされる。そのことは逆に、社会調査の停滞の裏返しというべきなのかもしれない。調査のことを解説した書や文章で、本書からの引用や参考文献に挙げられていることは多い。

編者の林知己夫博士が序文に記している。「社会調査ハンドブック編集を依頼されたとき、どうしようかと考えた。日頃、『あれもよし、これもよし』は性に合わないので、偏ったとしても『血の通った』ものにしようと思った。このため『必要な諸項目』を立て、その各項目について、実際に苦闘している人々を選び、私が最も信頼している人々に執筆をお願いすることにした。その筆者が実際に手がけているうちに感じとったことを、実例を交えて書いてもらうことにした。他の事典からの抜き書きや、外国文献の翻訳のようなことはいっさいしない。自らが体得したことを生々しく書くという方針を理解してもらった。」

輿論科学協会の理事長、会長であった加留部清が「7. 調査実施」を執筆している。調査実施計画の作成から始まり、細かい費目まで入った費用見積書の例、30以上の項目にわたる実施日程表の例、訪問調査員に配付する手引書の作り方、表「調査員の喜びと哀しみ」など、実務に即した資料を掲げながら、きわめて具体的に説明している。「主に調査データの利用者、分析者である自分にはそのような実務の説明は必要ない」と考える調査者がいるならば、「7.3.7 調査員活動の援助」にある、次の記述を読んだ方がよいかもしれない。「調査員の仕事に影響を与える第三の要因は、調査員と直接接触する職員スタッフの行動である。募集応募から、配置決めを聞き、調査の説明を聞き、調査の中途の連絡を聞いてもらい、検収してもらって手当を受け取るまですずと頼りにしたい職員スタッフの言動は、調査員活動の良否、ひいては収集する回答データの質に関係してくる。」

加留部は1997年4月から12月にかけて、輿論科学協会内で若手職員を対象におよそ2週間に1回のペースで「データエンジニア研修」という講義を行った。受講者による講義記録が残っている。第1回の要点として、「調査に携わるものは、データを使うユーザーとしてではなく、注文に合ったデータをつくり提供する『プロデューサー』だと認識しておくのがよい。…この研修は、単にコンピューター・プログラマーを育てるというのではなく、調査業務全体を理解し、調査データの本質を理解して総合的にデータ処理ができる技術者『データエンジニア』としての素養を深めるということを目的に行われるものである。データ処理に関する一切の工程はすべて自分たちで処理できるという能力を持っていることが必要で、『できないから外注する』のではなく、『人



手を借りるために外注する』という姿勢でいられることが望ましいのである」と記されている。第1回目の講義でなされた用語解説には、「データサイエンス：林知己夫博士の言葉。Design for Data、Collection of Data、Analysis on Dataの3つの要素から成り立つ。コンピュータの発達とともに、解析理論が理論だけで終わらなくなってきており、このことは、analysisの濫用という悪い面を引き起こしている。このような現状から、正しい方法を用いて科学的にデータを扱っていく『データサイエンス』が必要になってくるということ」とある。また別の用語解説として、「データエンジニアリング：加留部顧問の言葉。データというものは作り出すものである。役に立たなくてはならない。高いクオリティで、早く安く使いやすく、出来ばえのよい、価値のあるデータを作り上げなくてはならない。調査業界に携わる者はデータエンジニアであってほしい、立派なデータを作り上げる技術者となってほしいという願いを込めたものである」と記録が残っている。本書の加留部の執筆には、こうした考え方も反映されている。

今日、センサーや機器の進歩、インターネット利用の拡大から、膨大なデータの収集・蓄積が可能になり、これらのデータのビジネスや政策への活用が言われ、期待を集める。公的な調査では、調査結果や集計表をウェブサイトからダウンロードして簡単に手に入れることもできるようになった。本書が執筆された時点ではこのような状況はなかったが、手間ひまかけて悪戦苦闘してデータをつくりあげる著者たちの「血の通った」文章は、存在感を増しているようにすら感じられる。